

大澤広嗣著

**『戦時下の日本仏教と南方地域』**

法藏館、2015年12月刊、A5判、398頁、4,800円+税

菅 浩二\*

**1. 研究対象と本書の構成**

現在東南アジアと呼ばれている地域は、かつて日本から見た方角に従い「南方」と呼ばれた。この呼称自体が、日本から当該地域への勢力拡大を想起させるものである。事実として、独立を保ち続けたタイ王国以外は、この地域は第二次世界大戦時には欧米列強の植民地であり、一時的に日本軍の占領軍政下あるいは勢力下に置かれた。

本書はこの時期に、日本仏教界がこの南方地域にどのようにかかわったか、具体的には「南方進攻における日本仏教の応用」の歴史を、資料に即して跡付けた研究成果である。対象としているのは1937（昭和12）年の事変勃発以降、政府が南方進出政策を本格化させた1940（昭和15）年を経て、1945（昭和20）年敗戦までの時期である。そしてここでいう「応用」とは、布教活動を主目的とするものではなく、「政府や軍部により佛教者を動員した諸活動」即ち調査活動と文化工作を指す（本書5頁）。

このために本書は、各宗派が作成した資料を用いてその宗派を分析の枠組みとする従来の「宗派史観」的研究から離れ、宗派横断的な視点を探り、佛教界の連合組織である財団法人大日本佛教会、およびその周辺の、特定教派に属さない組織と関係者を扱っている。

本書の構成は以下の通りである。

**序論****第Ⅰ部 戦時体制と佛教界・仏教学界**

- 第一章 財団法人大日本佛教会の組織と活動
- 第二章 国際佛教協会の調査研究とその変容
- 第三章 財団法人佛教圈協会の工作要員養成

**第Ⅱ部 南方進攻と仏教学者の関与**

- 第一章 興亜佛教協会のインドシナ調査
- 第二章 ビルマ進攻作戦と仏教宣撫工作
- 第三章 マラヤの占領と宗教調査
- 第四章 佛教留学生のインドシナ派遣
- 第Ⅲ部 日本佛教の対南文化進出**
- 第一章 真如親王奉讚会とシンガポール
- 第二章 ジャワの佛教遺跡ボロブドゥール
- 第三章 バンコクの日泰文化会館と佛教界の支援

**結論**

本書の記述は、文献資料を駆使した史実の指摘を中心としており、総じて第Ⅰ部で組織、第Ⅱ部で人物、第Ⅲ部で運動に叙述の重点がある。一方で、それらの史実がいかに解釈されるべきか、または今日的な視点からどのように意義づけ・評価されるか、等は、言及はあるものの前面の問題となっていない。また先んじて断っておけば、評者は本書における著者の歴史記述そのものを一次資料に照会して妥当性を吟味できるような、十分な知識も資料も持ち合わせていない。

この意味で本書の成果からは、純粹に教えられことばかりであった。であるから、この書評で評者が行い得ることは、本書が、近代日本宗教研究において如何なる意味を持ち得るかを考えること、端的には、本書が拓いた研究の地平を今後どのように展開可能か、を探ることにある。この意味で、この書評は本書に対し、ないものねだりとなる傾きが否めないが、著者並びに読者諸賢のご了解を頂きたい。

\* 國學院大學神道文化学部准教授

## 2. 著者の視座について

まずは、ややルール違反かもしれないが、本書の中身ではなく、帶に記された言葉について尋ねたい。

「戦時下における日本仏教の位置づけを問い合わせる！」とあるのだが、「問い合わせる」というからには、ある対象に対する先行する「問い合わせ」の存在を踏まえて、改めて少し違う角度から問い合わせを投げかけるもの、となるだろう。では、これまでどのようであった「戦時下における日本仏教の位置づけ」が、本書による問い合わせの結果として、どのように新たな相を描くこととなったのだろうか。

先に述べた通り、本書はこれまでの「宗派史観」を離れて、また布教活動ではなく、教派を横断する戦時下の文化活動について焦点を当てている。この点は本書の研究方法の独自性である。そして本書が明らかにした歴史、仏教界の連合組織、特定宗派を背景としない団体、そしてその周辺の個人の、文化・学術面での政府・軍部との協働は、この独自の視座による成果である。ではこうした本書の成果は、先行研究に対し、具体的にどのように接続していくものだ、と著者は考えているのだろうか。

この事と関わって注意を引くのが、本書の冒頭部分にある、以下のような記述である。

「…敗戦から長い年月が経過した。当時の活動に関わった生存者の減少による記憶の風化が見られるが、一方でこれまで言及が回避されてきた東南アジアに対する日本仏教の関わりについて、ようやく実証的に研究することができる時期にきたともいえる。」（4頁）

「実証的」というのはここではevidentialという意味だろう。読みようによれば、これまでの研究に対する痛烈な批判ともとれるが、この記述についてはこれ以上の説明は見当たらぬ。

いわゆる「戦後」の視点から「戦前」の歴史を評価する視座—この「戦後」「戦前」の言葉遣いを以てする歴史区分に即した視座自体が、極めて特殊日本社会的であることは、もっと一般に意識されても良い—に立つ場合、対象が壊滅的敗戦で終わっているため、〈我が国はどこで誤ったのか〉のような問いを含んで、議論がなされることが多い。加えて外在的に与えられた断罪由来する「反省」の呼びかけと、それに対する反発は、その双方ともがウチ／ソト的な強い自集団意識を基盤とすること（例えば「日本人」は「…だった／すべきだ」のような）により、しばしば歴史に学ぶ真摯な態度というより、皮相な解釈を材料に肥大した自我意識からする相互非難の応酬に墮する場合もあった。

明言はされていないものの、著者は「実証的」であることにより、このような不毛な状況とは一線を画する研究上の飛躍を志向している、と理解される。その試み自体は、まずは成功していると言えるだろう。しかし「実証的」であることはあくまで方法論に過ぎず、目的ではない。東南アジアと日本仏教の戦時下の関わりについて、これまで言及が「回避」されてきたことの意味、そして本書がそれを乗り越えてゆくことの意味について、本書上梓より一年余を経た現在の、著者の考えを是非とも伺いたいところである。

## 3. 「戦後」から「戦時」を見る

ところで、海外の神社と大日本帝国の「外地」についての研究分野でも、第二次大戦時の状況は重い全体の要石となっている。その分野の一隅にあって評者は、自身の置かれた状況について真摯に思索し行動しようとする戦時下の人間を、平時の安全圏から一方的に糾弾し、自己の倫理性を担保する如き論には与しない、との姿勢で研究を続けてきた。この点では著者も、おそらく共通する姿勢をもっていると思われる。

一方でまた、知識人や宗教者の戦争関与には何でも「責任」がある、と後知恵の立場から言

い募るだけではあまり意味を持たないが、何に対するどのような責任を考えるべきか、当事者はどのように振舞ったか、の考察は重要だと考える。そのような議論により、個人の次元であれ、組織や制度、社会の次元であれ、「戦時」と「戦後」の間に、しばしば自明視される非連続と共に、連続の側面をも読み込む視座が導かれる。この点で評者は、第Ⅱ部での佛教研究者たちの群像、特に彼らの戦中の活動から、控えめな記述ながらも戦後の振る舞いへの道筋をも辿る描き方には、共感を持った（なお軽微な問題ながら、本書197頁の山形英応の活動記録に見える「両安居」は「雨安居」の誤記ではないか）。

本書が明らかにした、信仰実践の異質な宗派をも横断した動員体制は、上座仏教にヴェトナムの大乗佛教を加えた「南方」佛教なる外部が設定されることにより成立する、「日本」佛教の枠組みの下のものであった。ところで、ここで各宗派・各人において、他宗派と一括されることについての当惑や、逆に共同行動への積極的関心もあまり記述されていないようと思うが、これは評者の見落としてであろうか。またこのように、勢力圏下での宗派横断体制の形成と活動を、違和感なく行うことが佛教界の一般的な反応だった、とすれば、それはなぜだろうか。世俗的な国策への協力（あえて「迎合」とは言えない）という側面は本書で強調されているが、それを可能とし、正当なものとして受容せしめる、各宗派の宗教における何らかの視点は、或いは共通して抽出できないのだろうか。以上の点は、評者の勉強不足に由来する部分はあるのだが、「宗派史観」を超えると試みる著者の視点から、是非とも教示願いたいところである。

総力戦国家＝福祉国家という視点にとどまらず、総力戦体制によって導かれたシステム社会が戦後世界にも連続しているとの見方は、こんにちでは視野を拡げて一般化している。物資や労働力の合理的動員のみならず、従来もっぱら人文科学の対象とされていた精神的動員につい

ても、これと同じ社会科学的地平で考察しようとの試みも為されている。では上記のような複数宗派を束ねて動員する体制は、戦後の佛教者個人、佛教系組織、社会の各次元にどのような影響を残したのか。本書の成果を踏まえつつ、動員される側の内面が逆に主体化される局面等に注目して、更に考察を進めることも今後可能であろう。

#### 4. 「南方」に投影されたものとは

本書では「南方」現地側の視点については、様々な制約から、また焦点がぼやけることを避けてであろうが、扱われていない。しかしながら本書7頁が記すように、この東南アジア諸国側からは日本佛教の活動がどのように受け止められており、どのような影響が残されたのかまた残らなかったのか、についても、後続の研究による補完が期待される。

また、本書の成果を踏まえ、英國やオランダ、フランス側の資料や研究についても今後調査が進むことが期待されるだろう。周知の通りこんにちの政治史研究では、日本軍が、フランス領インドシナ（仏印）の北部に留まらず、1941年7月28日にその南部に進駐したことが、米英の態度を極度に硬化させ、対日戦争が決定的となつたことが定説化している。事実としてこの南部仏印進駐の後に、マレーやフィリピンにおける英米植民地政府の、日本の宗教政策に対する現地人向けネガティヴキャンペーンが強化され、その題材として台湾における地方庁主導の寺廟整理政策が使われた事が伝えられている。

本書第Ⅱ部第一章では、この南部仏印進駐により正に越えてはならない「一線」が越えられる直前に、現地で活動した佛教者について記されている。この際の佛教者の報告書（本書160頁）には、日本佛教の優位性を強調し、現地佛教、特には上座仏教を劣るものとみなしてその利用価値を探る、という捉え方が典型的に示されている。また他方で、第Ⅲ部で紹介される、真如親王伝承のシンガポールにおける政治的実

体化、ボロブドゥール遺跡への芸術的関心、裏返しの異国趣味のような日泰文化会館構想には、逆に「南方」という外部に、日本側から見たロマン主義的ともいえる要素が一方的に投影されていった一面も示されている。

多様な諸要素を、「日本」から見た「南方」として、またその逆の方向から一括することを可能とする遠近法そのものの問題として、忘れず提起しておきたいことがある。それは先行研究や関連分野においても指摘されてきた、日本仏教の対アジア観にある、オリエンタリズム的な性格である。日本仏教の南方関与においては、総じて「南伝」上座仏教は、その全体が日本仏教にとっての「日本のオリエント」の位置を持った、と言えるのではないだろうか。史実の指摘を主とした本書では、特にオリエンタリズムに関する言及がないが、この点についての著者の見解も知りたいと思う。

「東洋史」という学術的範疇を成立せしめた近代日本の対アジア観には、時に西洋「文明」の普遍主義の側に立って周辺地域を対象化しようとし、また時には西洋と対峙するものとして周辺地域と同一化しようという、両面的性格がある。これは、評者が一つ覚えのように引用しているStefan Tanakaの著作*Japan's Orient* (University of California Press, 1993) 等の研究によって早くから指摘され、更に評者自身があちこちで確認し展開させている見方である。

このような両義的な対アジア観は、日本が明治期を通じて置かれていた、自身も不平等条約下に準植民地状況にありながら同時に周辺に対して植民地帝国化していくという両義的位置に由来しており、またアジア主義は、このような両面的遠近法の中に生成した一つの視角である。

本書が扱った「南方」は、大日本帝国の「外地」の更に外側となる地域だが、仏教という共通要素を読み込まれることにより「亞細亞」であり「東洋」である範囲に含まれたのである。そして本書で扱われている仏教者たちの周辺に

はちらほらと、いわゆる大アジア主義者と言わた活動家や思想家の名前も見えている。むろん「大東亜共栄圏」という構想自体は、時局による地域覇権の政治的要求を、アジア主義的に粉飾したものではある。だがそこには同時に明治以来の、日本と「アジア」との関わりが総括的に投入されたともいえる。繰り返しになるが、この歴史を、「ソト」からの断罪に依拠し或いは「ウチ」を立てて反発するのみで、軽々に侵略だの解放だのと語ってはなるまい。資料に即して明らかになった史実を踏まえ、また現状の政治状況も考慮した上で、内在的に反省批判しまた継承することなしには、成熟した対等な協調関係などあり得ないだろう。

本書にも、全体の抑制的な筆致にこのような配慮がうかがわれる。しかし「あとがき」によれば、この地域で「戦争に翻弄され」「今となつては語られていない」(377頁)多くの仏教者たちの存在を知ることが、著者を本書執筆へと動かしたという。評者も、これら日本の或いは現地の人々の生と死の重みは、日本とかの地域の人々を今も結んでいると信じる。改めて、本書をまとめられた著者の真摯な努力と静かな熱意に、深甚なる敬意を表したい。

## 書評へのリプライ

大澤広嗣\*

戦時下に日本の仏教界は、東南アジアに対して、どのように関与していたのか。著者の疑問と関心をまとめたものが本書である。

今回、小著を書評された菅浩二氏は、近代日本宗教の研究に「如何なる意味を持ち得るか」との視点から、本書の意義を問うべく評してくださいました。以下に、氏から頂いた問い合わせに応答したい。

### 1. 本書の立場

本書は、日本仏教の南方関与について、一次資料を駆使して、客観的な叙述を試みた。その際に、本書の中において「実証的」と記した。

\* 文化庁文化部宗務課専門職

しかし、本書中で具体的な方法を説明しておらず、評者から「あくまで方法論に過ぎず、目的ではない」との指摘を頂いた。

この場を借りて補足したい。周知のように、近代日本の仏教教団による対外関与については、既に多くの先行研究がある。研究の中には、宗門大学に属する教員や僧籍を持つ研究者が、自らの立ち位置と関わりがある宗派について、過去の戦争関与を批判——世代を超えた仏教者の自己批判ともいえる——したものが多いた。

私は、これらの研究は、学究の立場から平和へのメッセージとして、学問が社会と接続できる重要な方法であると考える。しかし、中には、結論ありきの論調もある。

仏教界における戦争の関与は、政府の制度と施策を踏まえることが、実態の解明の手掛かりであると著者は考えた。特に、政府が仏教界を効率よく動員できたのは、政府と仏教各宗派の間に立った、仏教界の連合組織である財團法人大日本佛教会の存在が鍵であったことを本書で指摘したのである。同会は、これまでの宗派史観からは見えてこない存在であった。

また、評者は本書の帯の文言にある「問い合わせ」について、「新たな相」を問われた。日本仏教の対外関与は、朝鮮や台湾、中国、満洲に研究の蓄積があり、東南アジアが少ないことに、著者は長らく憂慮していた。研究が希薄なる理由として、日本の仏教界が当該地域に対して関与した規模と時間が、東アジアと比較すると小さいからであろう。

しかし、過少であることは無視してよい理由にはならない。戦時中に日本は、豊富な資源を求めて東南アジアの全域に進攻していたからである。本書で述べたように、仏教者が要所で関わっていたのだ。

現在、我が国と当該地域の関係は緊密である。過去を直視することが、現在と未来の相互理解に資すると著者は考える。仏教を通じた日本と東南アジアの「昭和史」を描きたかったの

が、本書の動機の一つでもある。

## 2. 宗派の連携と教学、対アジア観

評者から、「他宗派と一括されることについての疑惑や、逆に共同行動への積極的関心もあり記述されていない……。各宗派の教學における何らかの視点は、或いは共通して抽出できないのだろうか」と指摘を頂いた。

各宗派の共同行動に伴う、宗派間の葛藤や競合については、確かにあったであろう。財團法人大日本佛教会は、全宗派が参加していたため、組織としての意志決定に多大な調整があったことが想像できる。さらに、各々の宗派間よりも、同一の宗派内でも協調が難しかったと思われる。なぜなら、1940年の宗教団体法の施行後、同法に基づく宗教団体として設立認可を受けるため、1941年から翌年にかけて、文部省の指導により共通の宗祖を仰ぐ諸派は、13宗56派から13宗28派に統合して、認可を受けていたからである（浄土真宗各派、曹洞宗などは除く）。管長や局長などの幹部ポストは限られており、宗派の統合後は、旧宗派から均等に人事を配置することに、内部で人間関係の調整を要したのである。

宗学者の個人による戦争関与についての教学や意見はあったにせよ、異なる教義を持つ諸派を統合した故に、宗教団体法下における宗派での教学の整備は、いかなるものであったのか。戦時下ゆえに議論が十分ではなかったのである。教学の形成については、今後の課題といい。

また評者から、「先行研究や関連分野において指摘してきた、日本佛教の対アジア観にある、オリエンタリズム的な性格」について、見解を求められた。

宗主国と被宗主国との間にある権力関係の分析に際しては、オリエンタリズムの視点は不可欠である。しかし、本書の戦略として、オリエンタリズムの概念を用いないで、日本佛教による南方関与の分析方法を模索した。戦時中におけ

る日本仏教の思想と実践について、アジア諸地域の仏教者に対しては、自らの優位性を標榜していたことを読者は想像できよう。植民地研究では参照されることが多い視点であるが、なかには、オリエンタリズムの議論を安易に援用して、当事者を批判するだけの研究もある。結論ありきになることを避けるため、本書では、制度と施策から読み解いていく手法をとったのである。

### 3. おわりに

以上で、評者から頂いた指摘に対して、若干の応答をした次第である。刊行を経た今もなお、まだまだ課題が残されていると自問している。研究には終わりがなく、今後も仏教を通じた、我が国とアジアとの関係史を考察していく所存である。なお、評文中にて、「両安居」が「兩安居」であるかとの指摘があったが、原資料の誤植であるとはいえ、引用に際して留意すべき点であった。

最後に、小著の書評を担当された菅浩二氏には謝意を申し上げる。